

偕行現代考

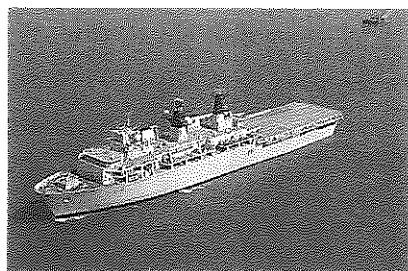
英国揚陸艦の

東アジア展開

編纂委員会

2018年4月11日、英国のウイリアムソン国防大臣は同国海軍の揚陸艦「アルビオン」が北東アジアに展開したと発表した。この揚陸艦は、どんな艦艇であり、その展開にはどんな意味があるのだろうか。

「アルビオン」は、上陸作戦を専門とする海兵隊を載せて機動し、洋上から目的地への戦闘展開を任務とするドック刑揚陸艦である。全長176m、幅28.9mで、巨大な船体に、操作・航海にあたる300名の乗員と、256名の海兵隊員、戦車・装甲車などの各種車両・資材などを搭載できる。



イギリス海軍の揚陸艦「アルビオン」。艦後方に備える甲板でヘリコプターの発着も可能（画像：イギリス国防省）。

揚陸艦の特色はその船尾で、海兵隊員を上陸させるため陸上用舟艇4隻をドックに収容し、船体を後方に少し傾けてドックに注水し、艦内から上陸用舟艇を発進させる。ヘリを運用する甲板もあり、海と空から海兵隊員を送り込む能力を備えている。

こうした能力を持つ「アルビオン」は、海兵隊の上陸拠点というべき存在である。

ではこの「アルビオン」を、英国はなぜ北東アジアに展開したか。第1の狙いは、東アジア諸国との連携強化。「アルビオン」の展開により、様々な国と共同訓練を行う予定。

昨年の12月、日英の外務・防衛関係者合「2プラス2」で、陸上自衛隊と英陸軍が日本で初めて共同訓練を行うことで合意した。今年10月、英陸軍が陸自との共同訓練のために来日し、上陸演習を行う。

両国は安保条約こそ締結していないが、情報保護協定や物品役務相互提供協定を結んでいる。両政府内では、双方を「準同盟国」とみなす機運が高まっているとされる。

第2の狙いは、北朝鮮に対する経済制裁に加わることで、国際協調を示す。北朝鮮は制裁対象となっている物資を他国の貨物船等から「瀬取り」と呼ばれる方法で入手しており、これの取り締まりに加わっている。

もともと英国は、朝鮮戦争で韓国支援のための国連軍の一員として参戦し、休戦以降も朝鮮国連軍司令部に要員を派遣してきた。そうした背景から、英国は他の欧州諸国より北朝鮮情勢については関心が高い。

英国海軍は「アルビオン」に加え、さらに2隻の戦闘艦「サザerland」と「アーガイル」を、2018年内に北東アジアへの派遣を決定し、すでに「サザerland」は横須賀に寄港した経緯があり、海自との訓練を予定している。また「アーガイル」も12月に日本を訪問する予定。

1年もの間に、3隻もの英国海軍艦艇がアジア太平洋地域に展開するのは稀である。また、2020年代から本格運用が始まる新鋭空母「クイーン・エリザベス」も、アジア太平洋地域でパトロール任務に就く。河野外相は、「英国がスエズ運河の東に戻ってくることを大いに歓迎する」と発言した。

ではなぜ、英国海軍が急速にアジア太平洋地域へ艦艇派遣を強化し始めたのか。二つの理由が考えられる。

第1は、近年の中国による南シナ海進出への対応。中国はその強大な経済力と軍事力を背景に、南シナ海における人工島の造成や軍事活動の強化により、周辺国との軋轢を生じさせている。そうした動きは、英国にとって無関係ではない。南シナ海に面しているプ

ルネイ、マレーシア、シンガポールは、英国と安全保障上の協力関係にあり、特にブルネイには少数ながら数百名規模の英軍部隊が駐屯している。

また南シナ海は、世界中の大型タンカーや貨物船が利用する「シーレーン」になっており、ここで紛争が起これば世界経済に大きな影響を及ぼす。

そうした背景から、中国の強硬な姿勢に対し英国は、米国や日本と歩調を合わせ、対抗する構えをとっている。

実際に、先に述べた「アルビオン」、「サザerland」、「空母「クイーン・エリザベス」は、中国に対抗する形で南シナ海における活動が予定されているとの報道もある。

第2の理由は、アジアにおける英国製兵器の輸出拡大である。近年、アジア各国は軍備強化を進めており、兵器輸出の大きな市場になっている。そこで英国は、そうした国々への兵器輸出を視野に、アジア太平洋地域に軍艦や戦闘機を派遣し、軍事的存在感を示し、自国兵器のアピールを図っている。

特に島国が多いアジア太平洋地域では、大小様々な艦艇から、そこに搭載する装備品に至るまで、幅広い海軍関係の兵器需要が期待できる。そこで、今回の「アルビオン」のような英国海軍艦艇の派遣は、非常に大きな意味を持つことになる。